

町火消から消防団へ

我が町の災害は自ら守るといふ制度は古くからあり、現在は「消防団」と呼ばれる組織のもとに、町の有志の方が有事に備えて訓練に励んでいます。



消防操法大会で優勝した第6分団

去る6月3日、中野消防署管内で組織されている「消防操法大会」で、この地区の『第6部分団』がみごとに優勝をしました。そこでこの「消防団」の今日までを、過去をさかのぼって調査をしてみました。

- 寛永6年 大名火消が組織される
- 慶安3年 幕府に定火消を置く
- 享保3年 大岡越前により町火消が設置される
- 享保4年 有名な「いろは48組」が結成される
- 明治3年 消防団に改められる
- 昭和4年 防護団が発足
- 昭和14年 消防団令が制定
- 昭和22年 消防団令が制定、消防団は消防団に改組
- 昭和23年 警察部門から分離独立

そこで我々の記憶に残るのは、あの戦時中の消防団の働きです。女性の「国防婦人会」と共に戦地に行かない男子は半強制的にこの組織に入り、『空襲』に対処した団員の決死的な活躍が、今も脳中の奥に残されています。



昭和15、16年頃の警防団  
(後方の建物は旧東中野小学校)

ゆうれい坂

民話というものは、どの町にもあり、過去の出来事や伝説を挿話にしたりして語り継がれてきています。

この町にも誰言うことなく、そのような場所があります。現在三中の前の坂道を、我々子ども頃から「ゆうれい坂」と呼んでいました。そう呼ばれるのには何か根拠があるわけで、昔この地区に住んでいた或る家で不幸な事件があつてから、あの坂道を通るとおぼけが出るぞとよく言われました。

現在は家屋も両側にあり、道も舗装され街灯もあるのですが、そのようなものが出るとは毛頭考えられません。昭和の初め頃までは、本当に寂しい坂道でした。

道幅も狭く、両側は木々や篠竹（しのだけ）が茂りうっそうとしていて、昼なお暗い坂道だったので。ましてや夜など街灯もない真つ暗な坂道を通つた記憶はありません。

ただ、華洲園（小滝台）からこの辺一帯は昆虫の宝庫で、セミや甲虫・トンボ・玉虫など昆虫採集の絶好のルートでした。

麦わら帽子をかぶり、篠竹にモチ（粘着剤）をつけ、セミやトンボを採つたあの頃が懐かしく思い出されます。



現在の「ゆうれい坂」